

ネクラーフ派カザークの祖国帰還まで

中 村 喜 和

はじめに

最近では、たとえばソビエトの作家ショーロホフの長篇小説「静かなるドン」などを通じて、コサックの名は日本の読者にもわりとなじみぶかいと思われる。以下の文章はこのコサックの1集団の歴史に関するものであるが、本来この言葉はチュルク諸語で「自由な人間」「向こう見ず」あるいは「放浪者」ほどの意味をもつ kazak に由来しており、ロシア語における発音を考慮して、ここではカザークという表記を用いることにしたい。

カザークは現存する文献では14世紀の修道院文書に「作男」の意味ではじめてあらわれるが、早くも15世紀には、当時のロシアの辺境であるドン、ヴォルガ、ドニエプルなどの大河の下流に国家の支配を受けない自由民としてのカザークの共同体が形成された。彼らの大部分はロシアからの逃亡農民であったと考えられている。はじめカザークたちは狩猟、漁撈、養蜂、それに掠奪を生業にしていた。モスクワを中心として形成された中央集権国家は16世紀から17世紀にかけて南方および南東方面の国境の防備のためにカザークを利用する。それを国家への「勤務」とみなしてツァーリの政府はカザークたちに金銭や弾薬や穀物を報酬として送った。17世紀後半以後、カザークの居住する地域は次第にロシア国家の領域に組み入れられ、カザークたちはそのまま土地の所有を認められるとともに、地域ごとに特権的な軍事集団を形成するにいたった。帝政期のロシアでカザークが法的にも独自の身分を形成したことはよく知られている。

その発生の事情からもうかがわれるように、カザークは尚武を宗とし、独立不羈の精神をながくもった。「シベリアの征服者」エルマーク、それぞれ17世紀と18世紀の大農民戦争の指導者たるステパン・ラージンとエメリアン・プガチョフらがいずれもドン地方出身のカザークであったことは改めて言うまでもあるまい。

ドン・カザークがひきおこした反乱の一つにブラーヴィンの蜂起がある。1707年ピョートル一世は逃亡農奴の搜索とその連れ戻しのためにドン下流地方へ軍隊を派遣した。これに対して、「ドンは裏切らず」の伝統にしたがってコンドラーチ・ブラーヴィンを首領とするカザークが立ち上がった。はじめカザークの奇襲が成功し、暴動は一時ドンとドニエプルの二

つの大河にはさまれたステップ帯にひろがるが、カザーク上層部の分裂のために翌1708年夏ブラーヴィンはドン・カザークの本営チェルカスクで非業の死を遂げた。一説には自殺ともいわれる。ブラーヴィン派の崩壊とともに、政府軍によるきびしい懲罰がはじまった。捕えられた何百人という叛徒たちが一斉に首をくくられた。

ブラーヴィン派の有力なアタマン（カザークの長は伝統的にアタマンと呼ばれた）にイグナート・ネクラースフという人物がいた。ブラーヴィンの死後もネクラースフは抵抗をやめなかったが、すでに大勢が決したのを知って、まもなく部下とその家族を連れてドンを越え、北カフカスのクバン川へと去った。そこは当時トルコに服属するクリミア汗国の領域であった。ネクラースフにしたがった人びととその子孫はネクラースフ派と呼ばれ、その後オスマン帝国領内で幾度も居住地を変えながら、独自の共同体を維持しつづけた。彼らが発揮した団結の堅さには目を見はらせるものがある。彼らは19世紀以来今世紀の60年代にいたるまでいくつかのグループに分かれてロシアに帰国しているが、異境にあって彼らがどのような生活を送ったか、2世紀半におよぶながい期間どのようにカザークとしての同一性を失わなかったか、を概観するのが本稿の目的である。

1. 流浪の軌跡

ネクラースフがブラーヴィンの残党とともにクバンにおもむいたのは1708年の秋である。この時どれほどの人数が彼にしたがったかについてはさまざまな臆測があって、判然としない。19世紀の歴史家のソロヴィヨフはその有名なロシア史の中でネクラースフが「2000人の賊徒を連れてクバンへ逃げた」⁽¹⁾と書いている。この数字は政府軍のある将校の記録にもとづいているようである⁽²⁾。クバンの郷土史家P.コロレンコはネクラースフが数百家族をひきつれたこと、その後あとを追う者があり、結局は老若男女合わせて8000人がクバンへ去ったとしている⁽³⁾。これは2000の「賊徒」とその家族を加えた数にかなり近接している。これに対してソビエトのフォークロリストで帰国したネクラースフ派から民話や民謡を採録したF.トゥミレーヴィチは、戦士5000、家族合計6万5000ないし7万という数字を挙げている⁽⁴⁾。これにも相当の典拠が示されているので、むげに斥けることはできない。ここでは諸説が一致しないことだけを指摘しておく。

ところで、クバン河畔にはすでにロシア人が住みついていた⁽⁵⁾。17世紀の中葉ロシア正

(1) С.М.Соловьев, История России с древнейших времен, кн.8, М.,1962, стр.195.

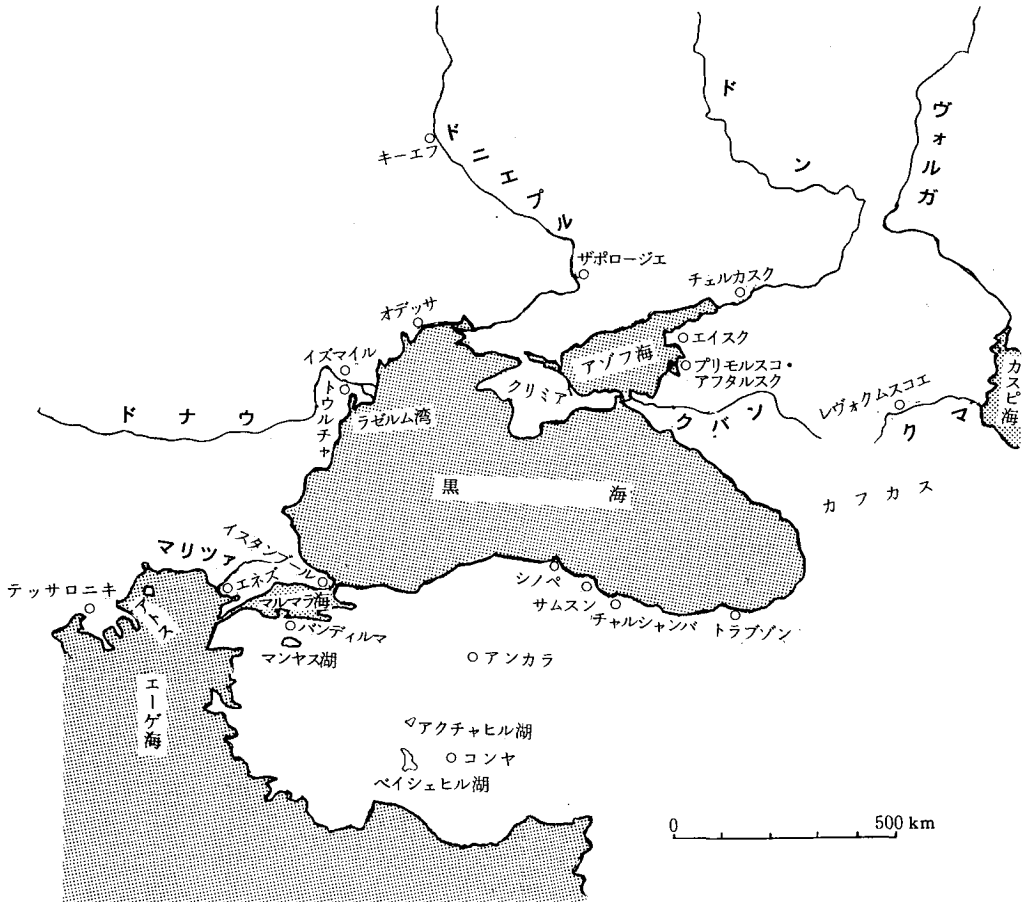
(2) Е.П.Подъяпольская, Восстание Булавина, М.,1962, стр.186

(3) П.П.Короленко, Некрасовские казаки. "Известия Общества любителей изучения Кубанской области", вып.2, Екатеринодар, 1900, стр.17-18.

(4) Ф.В.Тумилевич, Сказки и предания казаков некрасовцев, Ростов на Дону, 1961, стр.5.

(5) А.П.Шапов, Русский раскол старообрядства, Казань, 1859, стр.8.

ネクラースフ派カザーク関係略地図



教会の典礼改革に反対して国教会からはなれたいいわゆる旧儀式派あるいは旧教徒で、国教会からは分離派と呼ばれる人びとである。政府は教会当局とともに旧教徒にきびしい迫害を加えたので、そのころシベリアの奥地や国外へのがれる者が跡をたななかった。ネクラースフをはじめ彼にしたがうカザークたちも信仰の点では旧教徒に属したから、先住していたロシア人もネクラースフ派に合流した。

ネクラースフ派のクバン移住にさいしてはトルコ^{スルタン}皇帝アフメド三世の許可があったという⁽⁶⁾。ネクラースフ派がモスクワの政府とカザーク支配層にはげしい敵意をいいていたことは当然の成行だった。出国の翌年からネクラースフはほとんど毎年のようにタタールやバシキールなどの遊牧民と組んだり、あるいは単独でロシアに攻め入って、政府軍と戦った。1735 - 39年のロシア＝トルコ戦争でもトルコ側に味方する。1730年代から彼らはクバン軍

(6) П.П.Короленко, указ. соч., стр.18.

団と名乗るようになった。ネクラースフ自身は1737年に戦死した。

ネクラースフ派がクバンを捨て同じトルコ領内のドナウ河口地方へ移った年代についても二つの説が対立している。上述のトゥミレーヴィチは1740年代としているが⁽⁷⁾ コロレンコによれば1770年代の後半である。1768-74年のロシア＝トルコ戦争の結果キュチュク・カイナルジ条約が結ばれ、クリミア汗国がトルコの支配を脱する。そのためネクラースフ派とクリミア汗との関係が悪化し、北カフカスからの退去を余儀なくされた、とコロレンコは述べている⁽⁸⁾。この説明にも説得力がある。

コロレンコにしたがえば、ネクラースフ派の大部分は1778年にクバンを出て黒海南岸のシノベなどを經由し、1779年以降何回かに分かれてダブルウジャと呼ばれる黒海西岸のドナウ河口地方に移った。このとき15戸ほどがクバンに残留し、また100家族ていどがシノベに近いチャルジャンバやサムスンに居ついた。ダブルウジャに移動したネクラースフ派はラゼルム湾に沿ったドゥナヴェツ村に1200戸、もうひとつのサルィキョイ村に400戸をかぞえた。ラゼルム湾をカザークたちがラージン湾と呼んだことは、19世紀の末にこの地をおとずれた作家のV.コロレンコの旅行記から知られる⁽⁹⁾。むろん当時はもうルーマニア領になっていた。

ネクラースフ派にとって不運なことに、ダブルウジャではブガチョフの乱の鎮圧後エカテリーナ二世の軍隊によってウクライナのドニエプル下流の本営を追われたザポロージェ・カザークと争うことになる。共にカザークであったが、ドン系のネクラースフ派はザポロージェ派と和合しなかった。ラゼルム湾での漁業で競争者の立場にあったし、前者が旧教徒であるのに後者は国教徒という信仰上の対立もあった。ダブルウジャではネクラースフ派がリボヴァン、ザポロージェ・カザークはルスナークと呼ばれて区別された。武力の点では故国をはなれたばかりのザポロージェ派が優勢であった。トルコ政府は両者に対してひとしく貢税を免除したうえ、自治と信仰の自由を認め、ロシアとの戦争のさいに出兵の義務を課した。1787-91年のロシア＝トルコ戦争では両派がトルコ側に従軍した。

この戦いでロシア軍がドナウにますます迫ったことが契機となって、ネクラースフ派の地中海沿岸マリツァ河口エノズへの移動がはじまった。1814年にはザポロージェ派との武力衝突で完全に敗北しドゥナヴェツが占領されたため、ネクラースフ派の大部分はダブルウジアからエネズへ移った⁽¹⁰⁾。マリツァ川は現在トルコとギリシャの国境をなしており、エネズは河口の東側、つまりトルコ領ヨーロッパの最西端にあたっている。ここでネクラースフ派は七湖と呼ばれる湖沼地帯に集落をつくって漁業をいとなんだ。

(7) Ф.В.Тумилевич, указ. соч., стр.6.

(8) П.П.Короленко, указ. соч., стр.33-40.

(9) В.Г.Короленко, Полное собрание сочинений, т.6, СПб., 1914, стр.3-4.

(10) 19世紀中葉にネクラースフ派はまだ8000人残っていたという説(P. Call, Vasily I. Kelsiev, Belmont, 1979, p.144)と、19世紀末にその直系はほとんど残っていなかったとする見方(В.Г.Короленко, указ. соч., стр.91)が対立している。ネクラースフ派以外の旧教徒が多かったことは確実である。

しかしまたしても戦争があとを追いかけてきた。1828-29年のロシア＝トルコ戦争のさいネクラースフ派の壮丁がトルコ軍に加わって出征中に⁽¹¹⁾、ロシアの一部隊がアドリアノポリスを経て長駆エネズに達し、このトルコ要塞を占領したのである。留守をまもっていたロシア系住民は塩とパンをささげてロシア風に侵入者を歓迎したが、戦争が終り男たちが戻ってくるやいなや、ネクラースフ派は急遽小アジアのマンヤス湖畔へと移住した。少しでもロシアから遠ざかろうとしたのである。

2. マンヤスにて

マンヤス湖はマルマラ海のアジア側、港町バンディルマの南、直線ではそこから20キロ足らずに位置する淡水湖である。ここでのネクラースフ派の暮らしぶりについては、実際にこの地をたずねた何人かの旅行者の手記、ならびに20世紀10年代と20年代にロシアへ帰国したネクラースフ派のもたらした口承の伝説を通じてある程度くわしく知ることができる。なおロシア語ではこの湖はマイノスの名で知られ、ここに住んだネクラースフ派はマイノス衆と呼ばれる。

まず今世紀の初頭までの期間にマンヤスをおとずれて何らかの記録をのこした人びとを列挙しておこう。

- 1837年 5月 イギリス人旅行家 W. J. ハミルトン
- 1841年 頃 亡命ポーランド人 M. チャイコフスキ(トルコ名サディク・バジャ)
- 1847年 11月 イギリス人旅行家 I. マクファレン
- 1863年 11月 ロシア人革命家 V. ケリシエフ
- 1886年 エリセーエフ(身分不詳)
- 1895年 6月 イスタンブール駐在ロシア大使館付医師 V. シチェポチエフ
- 1901年 6月 民族学者 V. ミノルスキイと K. スミルノフ

1829年直後にエネズからマンヤスへ移り住んだネクラースフ派の人数も明確にはわからない。それ以前に若干のネクラースフ派が住みついていた可能性もある⁽¹²⁾。マクファレン

(11) В.Ф.Минорский, У русских подданных Султана. "Этнографическое обозрение", М., 1902, стр.35. ではこのとき2500人が出征。しかし160人にすぎないという記述もある。cf. В.Ламанский, О славянах в Малой Азии, Африке и в Испании, СПб., 1859, стр.28. 出所は後述のマクファレン。

(12) В.Ламанский, указ. соч., стр.24. これはマクファレンの記録による。2人のイギリス人の旅行記はラマンスキイの引用を利用した。直接参照できなかったが、原書名を挙げておく。W. J. Hamilton, Researches in Asia Minor, Pontus and Armenia. London, 1842. I. Mac Farlane, Turkey and its Destiny. London, 1850.

の聞いたところでは、はじめマンヤス湖へ来たカザークは300人ほどだったというが、彼自身ここに足を踏み入れたときには戸数が300、成人男子500、教会5（つまり5集落に分かれていたのであろう）、教師も5人、司祭は2人であった⁽¹³⁾。これに対しケリシエフはマンヤス湖畔のロシア人村がかつてトルコ語でビン・エヴリ、すなわち千戸村と呼ばれていたと書いている。もっとも彼がこの地をたずねた1863年には悪疫のために戸数が200に減っていたという⁽¹⁴⁾。しかしこの数字も正確かどうか疑わしい。というのは1867年に157家族がマンヤスから南東400キロ、コンヤに近いベイシェヒル湖のマグ島に移住したにもかかわらず、80年代にマンヤス湖畔のカザークが3000人をかぞえたという証言があるからである⁽¹⁵⁾。

人口の流入もあった。1878年にはダブルウジャからかつての仲間がマンヤス湖へ移ってきた。その前年におこった新たなロシア＝トルコ戦争に追われたのである。ダブルウジャからベイシェヒルの北のアクチャヒル湖に移住した者も300家族ほどあった。彼らはのちにマグ島に渡ったりする。マンヤスへの新参者は馬車で3時間ほどはなれた場所に村をつくり、即位したばかりのスルタンの名にちなんでハミド村と命名した。それは新カザーク村とも呼ばれた。ミノルスキイによれば1901年にその戸数は180で、一方旧カザーク村の方は150戸であった⁽¹⁶⁾。マンヤス湖畔の二つのカザーク村のあいだにも対立があった。同じ旧教徒とはいえ、新しい来住者が教会のヒエラルキイに属する僧職者の権威を認めない無僧派であるのに対し、旧カザーク村の住民は容僧派に属したからである。

マンヤスへやって来たすべての旅行者を驚かせたのは、すでに何世代も異教徒にかこまれて暮らしてきたにもかかわらず、ここでは純然たるドン中流地方のロシア語が話されており、屋内のしつらえや服装もロシアと変わらず、ほとんど完全に自治が許されていて、家庭内でも共同体全体としてもピョートル時代そのままの家父長的な制度が保たれていることであった。まず言葉についてみれば、マイノス衆自身が自分たちのしゃべっているのが「最も純粋なロシア語」であることに誇りをもっていたことをケリシエフが伝えている⁽¹⁷⁾。それはおそらく、ザポロージェ・カザークなどと混住していたダブルウジャ時代以来の自信であったにちがいない。ケリシエフより40年遅く今世紀の初頭にマンヤスをおとずれたミノルスキイは、彼らの言語がロシア語の古い語彙を含んでいたこと（たとえば、「戦争」のことをvojnaと言わず、rozmir という）、日常会話にはかなりトルコ語の語彙が混入していたことを指摘している⁽¹⁸⁾。

ケリシエフがバンディルマで最初に出会ったマンヤスのカザークはルバーシカに帯をしめ、

(13) Там же, стр.25.

(14) В.И.Кельсиев /В.П.Иванов-Желудков/, Русское село в Малой Азии. "Русский вестник", 1866, июнь, М., стр.422.

(15) П.П.Короленко, указ. соч., стр.71.これはエリセーエフ某の報告。

(16) В.Ф.Минорский, указ. соч., стр.50, 65.

(17) В.И.Кельсиев, указ. соч., стр.415.

(18) В.Ф.Минорский, указ. соч., стр.66.

ルバーシカの裾には赤糸と青糸のみごとな刺繍をほどこしてあった。村に住む女たちは膝までの短いサラファンをまとい、縞柄の帯をつけ、ぎっしりと硬貨を紐につらねた首飾りをさげていた。外出のときにもロシア風の衣服を着ていた。壁には銃やサーベルなどの武器が吊されていた。よく整頓されたロシア式の百姓家で一夜を過ごし教会の鐘の音で目ざめたケリシエフはアナトリアのただ中で「自由な静かなるドンの考古学的博物館」⁽¹⁹⁾を見る思いがした。「静かなる」はもともとドンの美称であり、「自由な」というのはカザークがツァーリの政府の支配に服する以前をさしているのである。ドンの末裔たちは2年前に出た農奴解放令はむろんのこと、150年前にピョートルの建設した首都ペテルブルグの名さえ知らなかったというから、ケリシエフはあたかも浦島太郎たちの里に迷いこんだという印象をいだいたわけである。

ネクラーフ派の経済の基盤はここでも漁業であった。19世紀の半ばから土地を手に入れ木の鋤を用いて農業に従事する者もあらわれたが、どちらかといえば少数派だったらしい。農民派は漁民派より一般に富裕で、二つのグループのあいだには生活意識の溝が生じていく。たとえば70年の末に前者はオーストリア領内のペロクリニーツァ修道院で擁立された主教の権威を承認するが、後者はモスクワの統一教会と結びついた。20世紀になって祖国へ帰還するさいにも漁民派の方が積極的な態度を示し、両者は結局別行動をとることになる。

マンヤス湖での漁撈については移住当初からスルタンの勅許状が与えられていた。そのほか小アジアのさまざまな湖沼へ入漁料を支払って舟を出した。海でも漁をした。ケリシエフは彼らの漁場としてドナウ河口、トラブゾン、ソルニ、スミルナ、ボスフォラスなどの名を挙げている。さらにエネズやアトス、テッサロニキまで出漁したようである。黒ボプラの幹をくりぬいた全長4.3メートル、幅1.5メートルほどの小舟をあやつって、時に岸から15キロの沖合に出たという。遠隔地へ出かけるのはケリシエフによると秋のドミートリイの日(10月26日)から春のゲオルギイの日(4月23日)まで(ミノルスキイがハミド村で耳にしたところでは9月15日過ぎから5月まで)であった。つまり一年の半分以上男たちは村をはなれていたのである。出稼ぎのときにはロシア語でアルテリという集団単位で行動した。そのリーダーはやはりアタマンと呼んだ。捕った魚は塩漬けにしておもにギリシャ人の商人に売った。収入は3分して、教会と共同体と個人に分配した。

マイノス衆にとって最大の悩みは近隣に住むムハジールあるいはエルデキ⁽²⁰⁾、すなわちカフカスからのイスラム教徒の移住者との軋轢であった。その主体は好戦的なチェルケス人で、19世紀30年代末からマンヤス周辺へ移って来たようである。1853-56年のクリミア戦争後はその数がさらにふえた。彼らはトルコ政府から土地を買い取って、主として農業に従事した。元来カザークは農耕を忌避する傾きがあり、土地所有の観念には無縁だったので、衝突

(19) В.И.Кельсиев, указ. соч., стр.436.

(20) 移住者をさすアラビア語ハジャラに由来、エルデキはトルコ化した小アジアの種族のこと(df. В.И.Кельсиев, указ. соч., стр.423.)。

が頻繁におこり、しばしば刃傷沙汰におよんだ。このためマイノス衆は村の入口に絶えず見張りを置き、所用で村を出るときには武装しなければならなかった。

税金も大きな負担であった。ミノルスキイの記録によれば、20世紀の初頭彼らには次の3種類の税金が課されていた。第一に穀物について収穫の10分の1⁽²¹⁾。第二に兵役税として15歳以上の男子から毎年2メジェ⁽²²⁾。この金額をミノルスキイは3ルーブル20コペイカと換算している。これは当時の3円20銭にほぼ等しい。ネクラーフ派が兵役税を支払うようになったのは、クバン時代以来スルタンへの伝統的かつ唯一の奉仕義務になっていた軍役を1864年にいたって拒否したからである。ダブルウジャでも同じころ兵役税を払い始める。トルコに住むカザークのロシアに対する戦意がうすれたこと、他方トルコ側も装備が古く訓練のない漁民が大した戦力にならないと見切りをつけたものらしい。第三の税は魚の売上げの5分の1。これはオスマン帝国の債権国の金庫 *Dette publique ottomane* に直接吸い上げられた。

3. ベイシェヒルにて

1867年に157家族のマイノス衆がはるか内陸のベイシェヒルに移った理由は、ムハジュールとの争いと殺し合いの絶えない生活に愛想をつかしたためであることを、1895年にここをおとずれたJa. スミルノフという旅行者が聞いている⁽²³⁾。出発にあたって聖像、祈禱書、教会の鐘、アタマンのもつ杖を分けてもらったというから納得づくの離村であったと思われる。家財道具を257台の馬車に積み、ブルサの町とエゲルディル湖を經由して42日間の旅であった。居住地としてベイシェヒル湖にうかがふマダ島を取得するため金貨で300リラを支払うはずであったが、スルトンの厚意で100リラで済んだという。

スミルノフはマダ島のカザークたちが昔のロシア語と衣服を完全に保存していると述べ、ウクライナ風の粘土づくりの彼らの住いを詳細に描写している。20年間もアタマンをしているセミョンという老人は青いシャロワール（幅の広いズボン）に赤いシューバをまとっていた。

マダ島（トルコ人はカザーク島と呼んだ）の住民もおもに漁業で生計をたてていた。沿岸のトルコ系住民は魚をとらなかった。秋から春の復活祭にかけて男たちが他の湖や海へ出かける点もマイノス衆と同様であった。

マダ島移住者の運命は悲劇的であった。スミルノフの伝えるところでは、移住の翌年疫病が襲い、30家族が全滅した。そのため島での生活を断念してマンヤスに舞い戻った家族が30

(21) В.Ф.Минорский, указ. соч., стр.50. कोरोенкоによれば8分の1という。cf. П.П. Короленко, указ. соч., стр.71. 前者の方が信憑性が高い。

(22) कोरोенкоによれば10メジェ。П.П.Короленко, указ. соч., стр.71. これも信じがたい。

(23) Я.И.Смирнов, Из поездки по Малой Азии. "Живая старина", 1896, вып. 1. М., стр.13.

をかぞえた。残りの約90家族のうち1895年まで生きのびたのは30家族、男女合わせて150人にすぎなかった。その後の人口減少はさらに急激で、1912年には8家族だけが生きのこり、それでもマンヤスに戻ろうという者があれば、仲間に対する裏切者と見なして殺そうとしたという⁽²⁴⁾。

どういふ径路をたどったものか、マダ島のカザークのことがイスタンブールのロシア大使館に伝わった。1890年に大使館の医師がマダ島へおもむいて調査したところ、湖水が汚濁していて飲料に適さないこと、島全体がしばしば濃霧におおわれて健康に害をおよぼしていることが判明した。大使館ではカザークに対してこの島を立ち退くか、少なくとも住居を島の高所に移すことを勧めたが、そのいずれも島民に拒否されたという⁽²⁵⁾。

スミルノフが疫病と呼んだのはコレラとマラリアのことらしい。マダが瘴癘の地であったことは確かだ⁽²⁶⁾、ロシアに帰国したのちもこの出身者は顔色が土気色をしていてすぐに見分けがついたという。

19世紀の末30家族に減ってしまったマダ島カザークにとって深刻な問題は、若者の結婚相手を見つけることである、とスミルノフは述べている。同じ正教徒でありながら、ギリシャ人との通婚は固く禁じられていた。ネクラースフ派の生活をきびしく律する行動規範があったからである。

4. 「クルーグ」と「イグナートの遺訓」

トルコのネクラースフ派の村をおとずれた旅行者は例外なく、彼らがドン時代以来の共同体の制度を保ち、秩序ある集団生活をいとなんでいることに深い感銘をうけている。彼らは依然として自らをクバン軍団と呼んでいた。軍団の最高の議決・司法機関はクルーグ *krug* と呼ばれる成人男子の集会であった。クルーグは字義どおりには「円」を意味する。円陣会議とでも訳せようか。クルーグは年に1度定期的に開かれ、そこでアタマンとその副官たるエサウルを選んだ。任期はともに1年で、重任が可能であった。クルーグは裁判も行ない、死刑の判決を下すこともあった⁽²⁷⁾。

クルーグは初期のネクラースフ派がドンからもたらした制度であるが、それとともに彼らが代々語り伝え守りつづけた掟があった。ネクラースフ派はそれを最初の指導者の名にちなんで「イグナートの遺訓」と呼んでいた。この「遺訓」は彼らの年代記ともいふべき「イグ

(24) Ф.В.Тумилевич, указ. соч., стр.7.

(25) Там же, стр.262.

(26) Там же, №.51. にマダ島からの帰国者の話が収められている。

(27) ブラーヴィンの乱のちまもなく、ドンではクルーグによって象徴される自治制度が廃止されていた。ウクライナでは同様の制度がラーダと呼ばれた。ロシアの古い巡礼歌「41人の巡礼と公妃アブラクシア」にクルーグ制度がふれられている。この歌でアタマンの主人公は窃盗のぬれぎぬを着せられて生きながら大地に埋められる刑を受ける。「なるうど」5号、1981、30-38ページ。

ナートの書」に記録され、マンヤス湖畔の教会に保管されていたといわれるが、この書物はまだ発見されていない。口頭で伝えられたもので最も完全なのは、トゥミレーヴィチが1940年にセミョン・チャーシキンから聞きとったものである。チャーシキンは1854年にマンヤスで生まれ、クバン軍団のアタマンを何回もつとめた人物である。トゥミレーヴィチによれば、ラテン語をはじめトルコ、アラビア、ギリシャ、ブルガリア、グルジアなどの諸言語に通じ、「イグナートの書」を見たこともあったという。マイノス衆帰国にあたってはモスクワにおもむいて事前交渉を行ない、彼自身も1912年にロシアに帰った。トゥミレーヴィチはチャーシキンから民謡69、昔話15、伝説17、を採録している。次に掲げるのはトゥミレーヴィチが伝説に分類しているものの一つである⁽²⁸⁾。

チャーシキンによれば、ネクラーフは部下をマンヤス湖に連れていくときスルタンから次のような保証を取りつけた（カザークたちはネクラーフがクバンで戦死したことを信じていなかったのである）。

トルコ領内で教会は閉鎖されない
鐘をつくことも禁じられない
トルコ人とはまじわらない
イスラム教徒とは結婚しない
カザークの意に反して徴兵されない

部下たちには次のような掟をきめた。

ツァーリにしたがわず、ツァーリの支配するロシアには戻らない
分散せず、クルーグとアタマンの許可なしには村を出ない
軍団をはなれ、一人ではどこへも行かない
カザークはカザークを雇わない
各人は手に職をつけて働く
年少者は年長者をうやまう
各人の収入の3分の1を軍団の金庫に納める
個人で貧者を助けるときは相手に知られぬようにし、クルーグは公然と貧者を助ける
カザークは妻を愛し、これを侮辱しない
女は母、クルーグは女を保護する
ニコン派（国教会）の司祭は受け入れない
遺訓を守らぬ司祭は異端であり、殺してもかまわない
村内に酒屋を開かない
カザークは店をもたない、商人になつてはならぬ

(28) Ф.В.Тумилевич, указ. соч., №37. の注によれば、「イグナートの遺訓」には30以上のヴァリアントがある由。トゥミレーヴィチはネクラーフ派のある司祭のもとで40カ条以上の手書きの「遺訓」を見たともいう。

シャーシキンが列挙した以上の項目には含まれていないが、彼自身が別なときに語った話では、殺人や殺人未遂はむろんのこと窃盗や強姦や瀆神行為などにも死刑の厳罰が課されることになっていた。それらの禁止条項も「イグナートの遺訓」にはいっていたと考えられる。ネクラースフ派はトルコでも正直と廉潔をもって知られ、戦争の時にはトルコ軍の金庫、輜重、ハレムの警護をゆだねられるのが常だった、とケリシエフも書いている⁽²⁹⁾。

「イグナートの遺訓」はネクラースフ派の法律であった。その強制力の保証となった機関がクルグである。シャーシキンの回想によれば、クルグは次のようにして開かれた。出稼ぎから戻った者たちが復活祭を過ぎて1週間あまりたったころ、アタマンがクルグを召集する。その前夜、エサウルが村中に大声で触れて歩く。欠席者には30レヴァ(2ルーブル40コペイカ)の罰金が課される。欠席が3度重なると処罰される。クルグの会場は広場である。アタマンが中央の椅子に腰をおろし、長老たちがまわりのベンチにすわる。家族もちのカザークが前列に輪をつくり、その背後に18歳以上で未婚のカザークが立つ。さらにそのうしろに女たちが立つが、彼女らは決定には加わらない。全員が集まるとアタマンが立ち上がり、帽子をとって四方に腰をかがめ深々とお辞儀をし、口を切る。「栄えあるクバン軍団の勇士たち、クルグを司会する祝福をしてくれ。」まわりの者が「神が祝福してくれるぞ」と叫ぶ。こうして集会がはじまるのである。議題の順序は軍団全体にかかわること、すなわち出漁先、貢税の払い方、教師と司祭の選定などが優先し、ついで村内の寡婦や孤児に対する援助が論じられた。出征のときは遠征アタマンをまず選び、従軍すべき者を決めた。いったん決まると、肉親や他人を身代りに立てることは死刑をもって禁じられた。議事の最後に個人的な苦情がさばかれた。

軍団全体のアタマンは50歳代、遠征アタマンは40歳代、エサウルは30歳代というのが通例であった。アタマンを弾劾するクルグはとくに「イグナートのクルグ」と呼ばれ、だれでも召集することができた。シャーシキンは「イグナートのクルグ」が2回開かれたことを記憶していた。最初はクプチャーノフというアタマンが寡婦に然るべき保護を与えず、老人の教師に悪口を吐いたときで、クプチャーノフは鞭30本の罰を受けた。次はクラスニコフというアタマンがベロクリニツェ系の位階組織を承認しようとしたときで、彼はアタマンを罷免された⁽³⁰⁾。クラスニコフの事件は1871年ごろのことで、その後まもなくマイノス衆のうちの農民派がベロクリニツェから派遣された司祭を受け入れたことは上述のとおりである。

クルグ体制下のカザークの暮らしは必ずしも理想的とは言いがたかった。ムハジールや税金などの外部的な圧迫は仕方がないとしても、「イグナートの遺訓」そのものに起因する問題があった。クバン軍団という集団を維持することが自己目的となり最高の義務とされたために、個人的な行動はいちじるしく制約されざるを得なかった。ひとりでは村を出ることも

(29) В.И.Кельсиев, указ. соч., стр.443.

(30) Ф.В.Тумилевич, указ. соч., №.38.

できず、相互監視の意味で二人以上が行動をともにした。医者であったシチェポチエフは近親結婚から生ずる弊害に気づいている。トルコ人の若者と駈落ちしたある娘が家に力づくで連れ戻され、1週間後には井戸の中で死体になって発見されるというような事件もあった。ムハジールをはじめ周辺住民との係争などでトルコ当局と交渉するさい、アタマンはクルーグでの責任追求をおそれて効果的な手段をとれないという傾向もあった。ネクラソフ派の村はきわめて民主主義的な社会であると同時に、何よりも集団の原理が優先する閉鎖的な社会であった。集団を維持するために保守的、退嬰的にならざるを得ない側面があった。

彼らに対する外からの働きかけにはさまざまなものがあつた。たとえば、ポーランドの亡命者 M. チャイコフスキはスルタンに仕えカトリックからイスラムに改宗してサディク・パシヤと名乗っていたが、ドブルウジャやマンヤスの住民からなるオスマン＝カザーク軍団を組織しようとした。ロシアをやぶってポーランドとウクライナの独立を達成しようという遠大な計画の一環であつた。彼はマンヤスに来て軍団への参加を説いたが、クルーグの賛成は得られなかつた。マイノス衆のあいだでのサディク・パシヤの評判はすこぶる悪かつた⁽³¹⁾。それから20年後に今度はロンドン亡命中のゲルツェンの同志ケリシエフがマンヤスへやつて来た。ネクラソフ派はロシア人を憎んで生きては帰さぬという噂を真にうけて、ケリシエフは自分をスウェーデン人といつわっていた。旧教徒たちを革命派にひき入れることが彼の使命であつたが、マンヤスにはプロパガンダを実践できるような雰囲気はまるでなかつた⁽³²⁾。良かれ悪しかれ、マイノス衆はかたつむりのように堅く身をとぎしていたのである。

「イグナートの遺訓」からの抜け道もあつた。「村に酒屋を開かない」という教えは形式的には守られていたが、今世紀初頭マンヤス湖畔の村はずれにトルコ人の酒屋があり、カザークたちが入りびたつていた⁽³³⁾。40年前のケリシエフのときには、彼を泊めてくれたカザークが昼食前にどこからともなく強い蒸溜酒ラキを調達してきて、「金さえあれば何でも手にはいる」と告白した⁽³⁴⁾。概してトルコに住んだカザークたちは男も女も大のアルコール愛好者であつたようである。

「妻を愛せ」という教訓はもっと守られていなかつた。イスタンブールのロシア大使館の病院へ、酔っぱらつた夫と舅に理由もなく打擲されてかつぎこまれた若妻がいたことを医師のシチェポチエフが書いている⁽³⁵⁾。家父長制社会でこの種のことは稀ではなかつた。建前としては侮辱された妻はクルーグに苦情を訴えることが可能であつたにしても、実行はされなかつたのである。

(31) Там же, №.55. В.И.Кельсиев, указ. соч., стр.420.

(32) ケリシエフは自分の使命を全く明かさなかつたようである。

(33) В.Ф.Минорский, указ. стр.57.

(34) В.И.Кельсиев, указ. соч., стр.438. このラキはひどくまづかつたという。

(35) В.Щепотьев, Русская деревня в Азиатской Турции. "Вестник Европы", 1895, август, СПб., стр.564.

5. ユートピア「イグナートの町」をもとめて

マンヤスの湖のほとりに住むカザークも、そこからベイシェヒルに移ったカザークも、現在の場所に満足することなく、つねによりよい土地とよりよい生活を求めていた。その渴望がユートピア伝説となってネクラースフ派のあいだに生きつづけたことが、トゥミレーヴィチの集めた口碑からわかっている。もうひとつ、旧教徒という宗教上の立場のため、彼らは慢性的に僧職者の不足に悩むという事情もあった。彼らの生活にとって司祭は欠かせないのに、遠い異国にまで司祭を派遣してくれるような教会組織とつながりをもたなかったからである。イグナートはまだ生きていのにちがいない、彼のもとへ行けば古き正教の伝統を守る司祭が得られるであろう、という期待と希望が「イグナートの町」の伝説を生んだ。ネクラースフ派の体内には、自由の大地をもとめて故郷を出奔した遠いカザークの祖先たちの血が流れていたことも忘れることができない。

ネクラースフ派のユートピア伝説を最初に書きとめたのは、ベイシェヒルをたずねたスミルノフである。それによると10年ほど前のこと（すなわち1885年前後のこと）正しい正教の教えを守るキリスト教徒たちがバグダッドのかなたに住んでいるという噂が流れてきた。マダのカザークたちは二人の代表を選んで捜しに出した。彼らはまずアレクサンドレッタに行き、そこから隊商に合流してディアルベキルに達し、その先はヘロドトスの話に出てくる革袋の筏に乗ってチグリス川をバグダッドまで下った。二人のカザークは丸2月のあいだこの町に滞在して噂の正教徒がどこに住んでいるかたずねまわったが、満足のいく答は得られなかった。とうとう見つけれぬまま、バスラから紅海を経由して帰ってきたというのである⁽³⁶⁾。さらに7年前には、昔リュキアといった地方のどこかにロシア人の坊さんがいると聞いてでかけたが、当人はすでにエルサレムへ発ったあとで逢えなかった。これからはキプロスやエジプトやエチオピアへ捜しに行くことになっている、という話もスミルノフは聞いた。

マンヤスでミノルスキイがある老カザークから耳にしたのもこれと大同小異の話だった。その老人はアラビア人の土地に正教徒の町が見つかったという噂を信じ、明日にも出発する準備をしていたという⁽³⁷⁾。

トゥミレーヴィチがロシアに帰ったネクラースフ派から聞きとった「イグナートの町」の伝説のヴァリエントは20を越えていた⁽³⁸⁾。ここでは細部の分析に立ち入ることなく、主要な筋だけを再構成してみよう。イグナートはエネズとマンヤスにしばらく住んだが、まもなくもっといい土地を探すために、わずかな従者を連れて砂の海（これはアラビアの砂漠らし

(36) Я.И.Смирнов, указ. соч., стр.15.

(37) В.Ф.Минорский, указ. соч., стр.37.

(38) К.В.Чистов, Русские народные социально-утопические легенды, М., 1967, стр.295. トゥミレーヴィチは前掲書で半分以上公刊している。Ф.В.Тумилевич, указ. соч., №.7, 35, 37, 42-49.

い)のかなたへ出かけた。今、イグナートは町をつくって住んでいる。大きな町で教会が五つある。高い石の城壁にかこまれ、東西南北に門がついている。人びとは豊かに暮らし、庭をもった石の家に住んでいる。女たちは真珠やルビーや金の首飾りをつけ、金銀を錦に織ったサラファンを着ている。女も読み書きを学び、クルーグに参加する。夫は妻に手を上げることはない。妻を侮辱すれば死刑である。よそ者は門から入れないが、女の来訪者だけは別である。ご馳走をふるまってくれた上、衣服を土産に与え、丁重に送り出してくれる……。

トルコから帰ったカザークの中には、実際にイグナートの町を探しあてたが門から中へは入れてもらえずに引き返したという話を伝える者⁽³⁹⁾、仲間のだれかれが森や洞窟で偶然ネクラースフその人に出会い金貨を与えられたというような言い伝えを心から信じている者⁽⁴⁰⁾などがいた。

6. 帰 国

ネクラースフ派カザークのロシアへの帰国はかなり早くからはじまっていた。

まず19世紀のはじめ対ナポレオン戦争のさなかにトゥッチコフ将軍の呼びかけに応じて130人のカザークがダブルウジャからロシアとの国境を越えイズマイルの近くに移住した。彼らの集落はのちにスターラヤ(旧)・ネクラースフカと呼ばれる⁽⁴¹⁾。さらに1830年には1000人あまりのネクラースフ派がダブルウジャのサルィキョイ村からやはりイズマイルの近くに戻り、彼らの村はノーヴァヤ(新)・ネクラースフカと名づけられた⁽⁴²⁾。このカザークたちはサルィキョイから仲間とともにエネズに移らなかった者たちである。

1870年代の末にはシノペの近くのチャルシャンバなどからクリミアのチェルノモールへ帰ったカザークたちがいた。これはクバンからダブルウジャへの移動の途中で中継地に居ついた人びとである⁽⁴³⁾。

マンヤス湖の旧カザーク村からは1912-13年に150家族の漁民派がまずカフカスに移住し、革命時の紆余曲折を経て、現在はアゾフ海に面したクラスノダール地方のプリモルスコ・アタルスクに住んでいる。彼らの村は新ネクラースフ村といい、棉花の栽培と漁業を主たる生業としている。

1923年にはマンヤス湖のハミド村の住民が帰国し、上記の新ネクラースフ村から5キロはなれたポチョムキン村に落着いた。トゥミレーヴィチによると、彼らは2年前に帰国したりボヴェン、すなわちダブルウジャの旧教徒に合流してレーニン名称コルホーズを組織してい

(39) Ф.В.Тумилевич, указ. соч., №.44.

(40) Там же, №.48, 49.

(41) П.П.Короленко, указ. соч., стр.54.

(42) Там же, стр.62.

(43) В.Ф.Минорский, указ. соч., стр.34. 彼らは一時ロシア人を捕えては奴隷に売って生計をたてていた。cf. П.П.Короленко, указ. соч., стр.64.

る⁽⁴⁴⁾。

しばらく間をおいて、第2次大戦後の1947年にふたたび2万家族からなるリポヴァンが帰国して、アゾフ海に沿ったエイスク地区に到着した。

最近では1962年に、マンヤスに残留していた農民派を中心とするネクラースフ派が1000人帰国し、北カフカスのスターヴロポリ地方レヴォクムスコエに入植した。現在2つのソフホーズに分かれてぶどう栽培に従事している⁽⁴⁵⁾。

ネクラースフ派の帰国にはさまざまな動機が考えられる。「煙すら故郷では甘い」とロシアの諺はいう。ロシア語と父祖の信仰を捨てなかったネクラースフ派にとって、ロシアは愛憎二筋の感情のないまぜになった複雑な意識の対象だったのではあるまいか。かつて祖国は仇敵であったが、ドンは心の中のふるさとでありつづけたに相違ない。1905年の第1次革命で信教の自由がまがりなりにも認められたという事情も考慮しなければならない。他方、マンヤスでは教師の不足から子供の教育がますます困難になったこと、近代化をめざす政府によるトルコ化政策がすすめられる中で従来のような自治を維持することができなくなったことも、帰国をうながす要因として働いたことであろう。1912-13年の帰国のさいは、夫婦のあいだですら意見が分かれ幼児を夫のもとに残して妻だけがマンヤスを去るというような事例があったことをトゥミレーヴィチが紹介している⁽⁴⁶⁾。

最後にロシアに戻ったマンヤス衆は帰国の理由をたずねられると、「イグナートの言いつけだから」と答えたという⁽⁴⁷⁾。革命でツァーリズムがたおれたことを確認するのに半世紀かかったことになる。

コルホーズやソフホーズの中でドン・カザークの伝統的なクルーグ制がどのような変貌を遂げたかも興味をひかれるところであるが、それは本稿の主題の埒外である。

(44) Ф.В.Тумилевич, указ. соч., стр.214-215.

(45) "Спутник", 1983, август, стр.37-43.

(46) Мария・ヴォルコヴァの場合。Ф.В.Тумилевич, указ. соч., стр.229-230.

(47) "Спутник", указ., стр.43.

THE NEKRASOVITE COSSACKS IN EXILE

Yoshikazu NAKAMURA

Following the suppression of Bulavin's revolt which occurred in the reign of Peter I in the beginning of the 18th century, the *ataman* Ignat Nekrasov fled with the Cossacks under his command and their families from the Don to the Kuban, then a part of the Ottoman Empire. There, the Cossacks, so-called Old Believers themselves, were joined by other Old Believers who had previously settled down along the river, having escaped persecution by the State Church and the government. Together, these people became known as Nekrasovites.

The Nekrasovites, pressed by the southward expansion of Russia, moved in the 1740s to Dobruja, the delta of the Danube. But they soon clashed with Ukrainian Cossacks who went there to live after being driven away from the Zaporozhian Sech by Catherine II, and most of them migrated to the Aegean town of Enez on the mouth of the river Maritsa. However, frightened by the invasion of a Russian troop into Enez during the Russo-Turkish war of 1828-1829 years, the Nekrasovites moved on again across the Sea of Marmara to Lake Manyas in Asia Minor.

The main occupation of the Nekrasovites was fishing. The male adults were engaged in fishing from autumn to spring not only in the many lakes of Anatolia but also far away in the Black Sea and the Mediterranean Sea on very small boats. At first their only obligation to the Sultan was to offer, in times of war, one half of their capable youths to the Ottoman army. But this obligation was replaced by a tax in 1864.

The Nekrasovites preserved with astonishing tenacity the manners and customs which their ancestors brought from the Don, living on Lake Manyas as well as on the island of Mada in Lake Beyshehir where part of the Nekrasovites settled in the 1860s. According to the records of visitors to their villages (among whom were M. Chaykovsky, a Polish emigré, who converted to Islam and attempted to establish an Ottoman Cossack corps in the hope of regaining the independence of Poland and the Ukraine from Russia, and A. Herzen's agent V. Kelsiev who tried to win them over to the side of the Russian revolutionaries), the descendents of the Don Cossaks

in the midst of hostile heathens adhered to the Old Faith of the Russian Orthodox Church, spoke the Don dialect of Russian, wore the beautifully embroidered shirts peculiar to *muzhiks* and dwelled in Russian-style houses. Moreover they lived according to the strict rules known as "Ignat's behests", prohibiting them from returning to the Tsar's Russia, intermarrying with Islams, going out alone from the village, disobeying elders and so on, while over the community reigned the *krug*, a legacy of 17th century Don. The *krug* (literally, circle), a general assembly of all the men from the age of 18, was their supreme legislative and juridical organ and was held every year after Easter, at which time the *ataman* and his assistant officer, the *esaul*, were chosen. They were to execute the decisions of the *krug*.

Among the Nekrasovites the utopian legend of "Ignat's town" was transmitted from generation to generation. They believed that Ignat Nekrasov, their first leader, was still alive somewhere beyond a sea of sands (i.e., a desert) and had built a town where the true authentic church was preserved and every inhabitant enjoyed a rich and honest life. Indeed, many a venture was made to search out this "Ignat's town".

All their quests for this utopia, of course, ended in vain. But eventually it became possible for them to return home, for in Russia freedom of conscience was proclaimed after the first revolution of 1905. The first party of Nekrasovites, consisting of 150 families, returned to Russia in 1912-1913. But those who remained at that time continued to hesitate and it was not until 1962 that a second party of a thousand Nekrasovites left Lake Manyas and landed on the soil of their ancestors. As they put it, "so ordered Ignat". They at last "reached the tongue" (joined their compatriots), after 250 years of wandering in foreign lands.

It is reported that they organized *kolkhozes* and *sovkhozes* in Primorsko-Akhtarsk on the Sea of Azov and in Levokumskoe on the river Kuma in northern Caucasia. It would be interesting to know the fate of the *krug* in these new settlements.